

## 社会人の居場所における利用行動特性の分析

### — 東京都市圏におけるWebアンケート調査に基づく実態分析 —

Characteristics of the Behavior of Visiting the Third Place for Workers

- Actual Condition Analysis Based on a Web Questionnaire Survey in the Tokyo Metropolitan Area -

○ 山田崇史\*、長谷川慶幸\*\*

Takashi YAMADA, Yoshiyuki HASEGAWA

The purpose of this study is to investigate and clarify the characteristics of the "third place" that is frequented by workers. The results of this survey revealed that men tend to visit the third place on work days. On the other hand, women exhibited the opposite trend. Furthermore, we have confirmed a difference in the characteristics - such as used money and visit day - of the behaviors in the third places among occupations or incomes. Based on workers' intent and how they utilized these other spaces, their whereabouts were categorized as "purpose visiting facilities," "activity facilities," "communication and retail facilities," and "educational activity facilities." Furthermore, this study identified how the third place was used and how usage varies according to the location type.

*Keywords : third place, workers, actual condition of behavior*

サードプレイス, 社会人, 利用実態

#### 1. はじめに

##### (1) 研究背景

現在日本では、多様な働き方が存在し、社会全体で仕事と仕事以外の生活の双方の調和の実現が望まれている。厚生労働省<sup>1)</sup>による働き方改革では、「個々の事情に応じ、多様な働き方を選択できる社会を実現することで、働く一人一人ひとりがより良い将来の展望を持てるようにする」ことを目指しており、そのためには労働者のニーズの多様化、ワーク・ライフ・バランスに対応するための環境を作ることが必要であると述べられている。国民生活時間調査<sup>2)</sup>では、国民全体の1日の時間配分について調査している。この調査によると、1日の1/5~1/6は、睡眠（必需行動）や仕事（拘束行動）以外のことを行っている。また、総務省統計局による調査<sup>3)</sup>では、趣味・娯楽の行動者率は87%であり、近年増加傾向である。内閣府<sup>4)</sup>による調査においても、余暇を活用する割合は年々増加している。

一方、居場所について都市社会学者のレイ・オルデン

バーグ<sup>5)</sup>は、都市に暮らす人々には、サードプレイスという「こころのよりどころとして集う場所」が必要であると提唱している。サードプレイスは、インフォーマルな公共の集いの場として、あらゆる人を受け入れ人々が心のよりどころとして集う場であり、コミュニティが生じ、情報交換などが可能になる場所であるとしている。

以上の背景から、自由時間に人ほどどのような居場所でどのような行動をしているのかを明らかにすることは、今後、社会全体で仕事と仕事以外の生活の双方の調和を実現する上で必要であると考えられる。

##### (2) 先行研究

これまでに居場所やサードプレイスなど自宅や職場・学校以外の滞在場所に関する研究が行われている。林田ら<sup>6)</sup>は、働く人々の都市生活の質を支えている職場周囲のサードプレイスに焦点を当て調査している。働く人々ほどどのようなサードプレイスを職場周辺に構築しているのかを明らかにすることを目的とし、アンケート調査やディスカッションを行っている。それにより、セカンド

\*近畿大学生物理工学部人間環境デザイン工学科 講師・博士（工学） / Lecturer, Doctor of Engineering, Kindai University

\*\*ゼブラ（株） / ZEBRA CO., LTD.

プレイスの延長的性質を持つサードプレイスが働く場所付近に構築されていることを明らかにしている。

木下ら<sup>7)</sup>は、三重県において地域住民の自由な時間を過ごせる場所の選択特性などについて調査している。居場所の整備にあたっては、地域住民の属性・ライフスタイルに配慮し、地域の施設整備状況を踏まえ計画する必要があると述べている。

川村ら<sup>8)</sup>は、都市空間における自宅・職場・学校以外の場所を「まちなか」と定義し、成人を対象として「まちなかの居場所」に関する研究を行っている。まちなかの居場所と人々の生活の質との関係性を明らかにすることを目的としたwebアンケート調査を行っている。その結果、居場所の有無と生活の質・地域への意識との間にはポジティブな関係があることが統計的に示されたと述べている。

樋野ら<sup>9)</sup>は、高齢者が「特に予定のない時でも気軽に足を運べる場所」を「居場所」と呼び、その利用実態と意義を明らかにすることを目的としたアンケート調査を行っている。その結果、加齢に従って福祉施設など居場所の利用が高頻度となり、居場所の重要性が相対的に高まると述べている。

島山ら<sup>10)</sup>は、カフェの立地環境によって、利用者の行動に与える影響について研究している。都心型カフェから日本のサードプレイスの在り方について知見を得ることを目的とした行動観察調査を行っている。その結果、男性は個人作業、女性は会話や飲食の利用が多く、立地環境により利用者属性割合が異なることがわかった。またカフェ利用者の属性ごとに行動割合を用いて、立地環境ごとの店舗内の行動の差異を説明できると述べている。

小池ら<sup>11)</sup>は、福岡県において大学生を対象に居住地の商店街までの距離と満足度の関係についてアンケート調査している。商店街への「選好」因子の満足度への正の影響度は、遠くに住む学生ほど大きくなる傾向、商店街への「自分の居場所」因子の満足度への正の影響度は、近くに住む学生ほど大きくなる傾向、商店街への「関わり」因子の満足度への負の影響度は、近くに住む学生ほど大きくなる傾向を見出している。

山田ら<sup>12)</sup>は、郊外型キャンパスに通う大学生のストレス解消に利用されるサードプレイスの特徴を明らかにすることを目的としたアンケート調査を行っている。それにより、サードプレイスは大型ショッピングモールやカラオケ店、レジャー施設が多く、ストレス解消法は買い物や運動、カラオケが多いことがわかったと述べている。

また使用金額、利用頻度、滞在時間を説明変数としたクラスター分析を行い、有意差の見られる4つに類型化している。

### (3) 研究目的

研究背景で述べたように、現在日本では、社会全体で仕事と仕事以外の生活の双方の調和の実現が望まれている。このような社会を実現させるためにも、自宅や職場だけに留まらない他の居場所についても知見を深める必要がある。また、居場所における利用行動をより正確に把握することは、施設整備を行う上でも意味があると考えられる。そこで本研究では、働く社会人を対象として居場所における利用者の属性、利用実態を調査し、居場所に関する利用行動の特徴を把握する。そして、居場所における利用行動から居場所を類型化し、居場所と関連が深い利用行動の要素を見出すこととする。そして、ワーク・ライフ・バランスに対応するための環境づくりに貢献する知見を得る。

先行研究で述べたように、これまで居場所およびサードプレイスに関する研究では、居場所の利用者を高齢者や学生、成人に焦点を当てた研究が存在する。しかし、利用施設や調査地域が限定された研究が多く、首都圏に居住する働く社会人を対象として、居場所の利用者属性と居場所における利用行動との関係性を詳細に分析した事例は少ない。本研究では、居場所の種類、居場所での利用行動、調査対象者の属性を調査し、これらの関係性を分析することで居場所に関する新たな知見を得るという点で独自性があると考えられる。

## 2. 居場所と訪問行動のアンケート

### (1) 調査方法

表1に調査概要を示す。本研究では、東京都、埼玉県、千葉県、神奈川県、神奈川県の1都3県を対象地とし、居場所を持つ20代～60代の働いている社会人を調査対象者とする。調査は2017年12月にwebアンケートを用いて行った。webアンケートでは、対象者の性別や居住地などの属性の偏りを防ぐため、スクリーニング調査と本調査に分けて行い、回収した有効サンプル数は969となった。スクリーニング条件は、問1：働いているか否か、問2：居場所の有無である。回収した969のサンプルは対象者が居場所を持っていることを前提とし、居場所の無い対象者はスクリーニング調査によって除いている。そして、調査対象地、性別、年代を均等割り付けした<sup>13)</sup>。

表2にアンケート内容を示す。アンケート内容は回答者

属性と居場所についての大きく2つに分けられる。居場所の選択肢は、川村ら<sup>8)</sup>による分類方法を参考にした。なお本研究では、自宅から居場所までの移動時間、職場から居場所までの移動時間、訪問頻度を評価するために、移動する空間（自動車など）を除いている。なお本研究では、「現在、自分の居場所として訪れる場所」を居場所として定義している。

## (2) 回答者の属性

表3に回答者の属性別構成を示す。回答者の性別、年代、在住の都道府県は、均等割り付けを行っているため、おおよそ同数となっている<sup>注2)</sup>。職業は、会社員が約半数を占めている。勤務時間は、「6～8時間」と「8～10時間」の割合が多い。現在の場所で働いている期間は、「1～5年未満」が多い。現在の収入は、「100～400万円」が多い。同居している人は、「配偶者」が最も多く、次いで「子ども」である。現在の住まいの居住期間は、「1～5年未満」が多く、次いで「20年以上」である。

図1から図15に居場所についてのアンケート回答の集計結果を示す。図1の居場所は、「喫茶店・カフェ」が最も多く、次いで「実家・親戚宅」が多い。図2の利用目的は、「飲食」が最も多く、次いで「会話」、「読み物」、「運動・体を動かす」が多い。図3の訪問頻度は、「1週間に1回程度」および「1か月に1回以下」が多い。図4の滞在時間は、およそ6割が3時間未満である一方、およそ2割弱が6時間以上と回答している。図5のよく訪れる日は、「仕事が休みの日」が多い。図6のよく訪れる時間帯は、「午後（12～2時）」でおよそ半数を占めている。

図7のどれくらい前から訪れているかは、およそ3割が「1～5年未満」であるが、「20年以上」も一定数見られた。図8の誰と一緒によく行くかは、「自分のみ」でおよそ6割を占めている。図9の他人との交流の有無は、「ある」と「ない」でおよそ半数ずつである。図10の使用金額は、「0円」と「1～5000円未満」でおよそ半数を占めている。図11のどこからよく行くかは、「自宅から」で7割以上を占めている。図12の移動時間（自宅－居場所）は、「30分未満」でおよそ半数を占めている。図13の移動時間（職場－居場所）は、「30分未満」でおよそ3割強である。移動時間は、自宅から居場所、職場から居場所どちらも「120分以上」の回答がおおよそ1割見られた。図14の居場所の満足度（価格）は、「普通」が最も多く、次いで「満足」が多い。図15の居場所の満足度（居場所にいる人たち）は、居場所の満足度（価格）と同様、「普通」が最も多く、次いで「満足」が多い。

表1 調査概要

調査対象地	1都3県（東京・埼玉・千葉・神奈川）
調査対象者	居場所を持つ社会人（20代～60代）
調査時期	2017年12月
調査方法	webアンケート
有効回答者数	969人

表2 アンケート内容

1. 回答者の属性	
性別、年代、都道府県、職業、勤務時間（1日あたりの平均）、現在の場所で働いている期間、現在の収入（年収）、同居している人、現在の住まいの居住期間	
2. 居場所について	
居場所、利用目的、訪問頻度、滞在時間（一度あたり）、よく訪れる日、よく訪れる時間帯、どれくらい前から訪れているか、誰と一緒によく行くか、他人との交流（会話）の有無、使用金額（1か月平均）、どこからよく行くか、移動時間（自宅－居場所）、移動時間（職場－居場所）、居場所の満足度（価格）、居場所の満足度（居場所にいる人たち）	

表3 回答者の属性別構成

	回答数 (人)	割合 (%)
性別	男性	479 49.4
	女性	490 50.6
年代	20代	195 20.1
	30代	192 19.8
	40代	191 19.7
	50代	196 20.2
	60代	195 20.1
都道府県	東京	243 25.1
	埼玉	241 24.9
	千葉	243 25.1
	神奈川	242 25.0
職業	会社員	485 50.1
	派遣・契約社員	96 9.9
	個人事業主・自営業者	84 8.7
	法人経営者	17 1.8
	公務員	62 6.4
	パート・アルバイト その他	217 22.4 8 0.8
勤務時間 (1日あたりの平均)	4時間未満	72 7.4
	4～6時間	123 12.7
	6～8時間	317 32.7
	8～10時間 10時間以上	345 35.6 112 11.6
現在の場所で働いている期間	1年未満	156 16.1
	1～5年未満	315 32.5
	5～10年未満	207 21.4
	10～20年未満	170 17.5
	20年以上	121 12.5
現在の収入 (年収)	100万円未満	131 13.5
	100～400万円	407 42.0
	400～700万円	266 27.5
	700～1000万円	105 10.8
	1000万円以上	60 6.2
同居している人 (複数回答)	配偶者	548 46.2
	子ども	389 32.8
	親	181 15.3
	祖父または祖母	30 2.5
	親戚	15 1.3
	恋人または同居人	13 1.1
	兄弟姉妹	7 0.6
	孫	3 0.3
現在の住まいの居住期間	1年未満	114 11.8
	1～5年未満	238 24.6
	5～10年未満	169 17.4
	10～20年未満	220 22.7
	20年以上	228 23.5

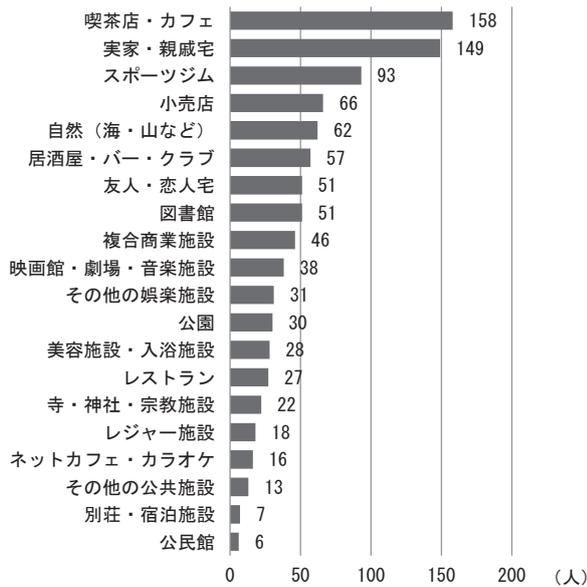


図1 居場所 注3) (n=969)

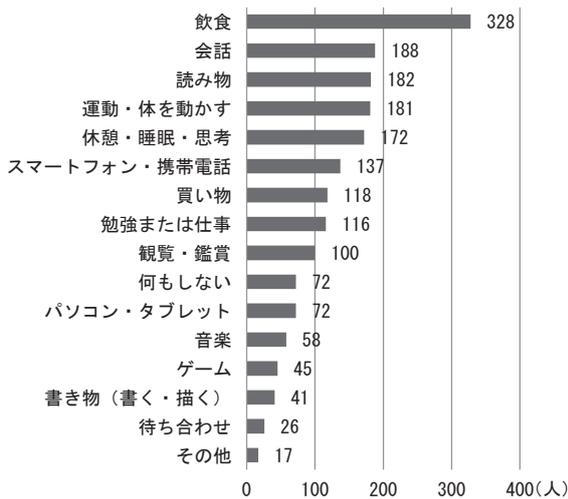


図2 利用目的（複数回答） (n=1853)

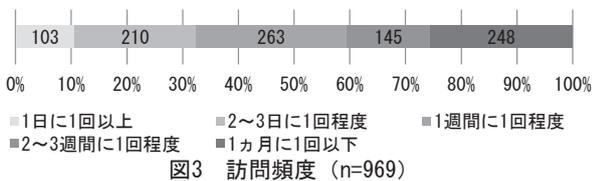


図3 訪問頻度 (n=969)

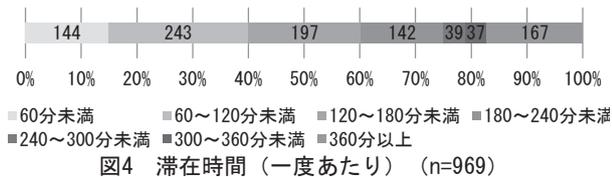


図4 滞在時間（一度あたり） (n=969)

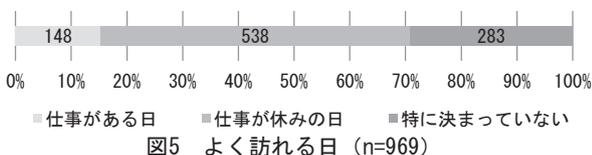


図5 よく訪れる日 (n=969)

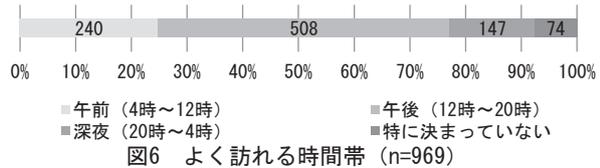


図6 よく訪れる時間帯 (n=969)

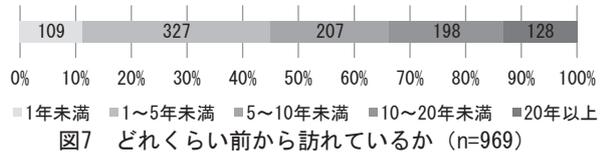


図7 どれくらい前から訪れているか (n=969)

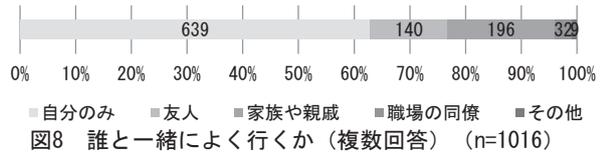


図8 誰と一緒によく行くか（複数回答） (n=1016)

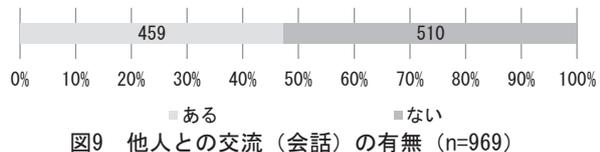


図9 他人との交流（会話）の有無 (n=969)

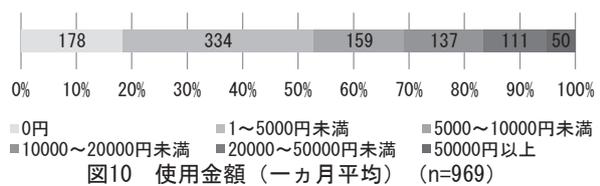


図10 使用金額（一ヵ月平均） (n=969)

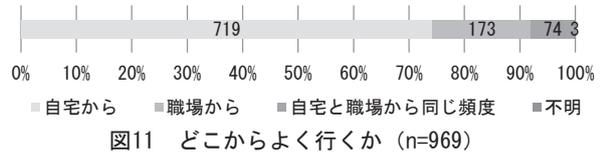


図11 どこからよく行くか (n=969)

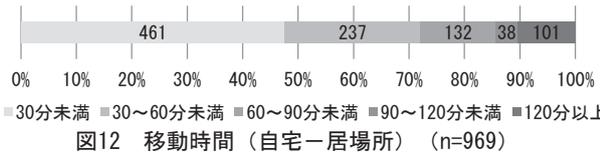


図12 移動時間（自宅～居場所） (n=969)

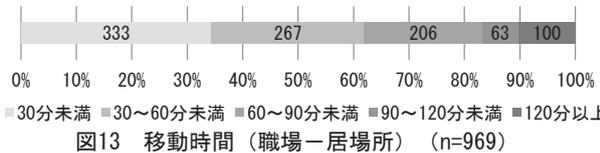


図13 移動時間（職場～居場所） (n=969)

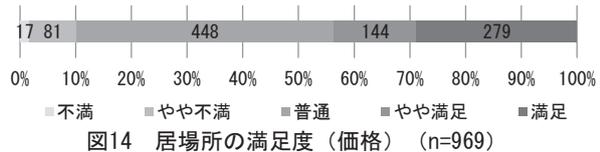


図14 居場所の満足度（価格） (n=969)

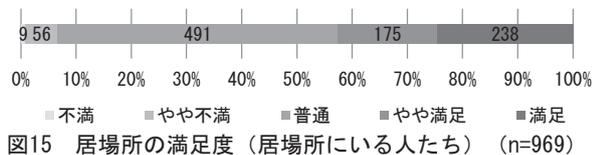


図15 居場所の満足度（居場所にいる人たち） (n=969)

### 3. 回答者の属性と居場所に関する利用行動の分析

回答者の属性と居場所に関する利用行動を分析するため、アンケート設問間で、 $\chi^2$ 検定を行った。表4に結果を示す。「性別」や「年代」など回答者属性と「よく訪れる日」や「どれくらい前から訪れているか」など居場所の利用行動に関して、多数の有意な結果が得られた。 $\chi^2$ 検定の結果、有意な差が見られた回答者の属性と居場所について、残差分析を行った。ここで、 $\chi^2$ 検定はアンケートの回答が「その他」や「不明」を除いた。

表5から表12に $\chi^2$ 検定で有意確率が1%以下の残差分析の結果を示す。表5に性別と居場所の利用行動の残差分析の結果を示す。「よく訪れる日」について、「男性」は「仕事がある日」が多く、「女性」は「仕事が休みの日」が多い。「他人との交流の有無」について、「男性」は「なし」が多く、「女性」は「ある」が多い。「移動時間（職場 - 居場所）」について、「男性」は「女性」より時間をかけている傾向が見られる。「居場所の満足度

(人)」について、「男性」より「女性」の方が高い満足度の傾向が見られる。

表6に年代と居場所の利用行動の残差分析の結果を示す。「よく訪れる日」について、「20代」は「仕事がある日」が多く、「40代」、「50代」は「仕事がある日」が多い。「どれくらい前から訪れているか」について、「20代」は「1年未満」、「1~5年未満」が多く、「50代」と「60代」は「20年以上」が多い。年代が高くなるにつれ、同じ居場所に訪れている年数が高くなる傾向であることがわかった。表7に都道府県と居場所の利用行動の残差分析の結果を示す。「移動時間（自宅 - 居場所）」について、「東京都」は他県に比べて、移動時間が短い傾向にある。表8に職業と居場所の利用行動の残差分析の結果を示す。「よく訪れる日」について、「会社員」は「仕事がある日」が多く、「個人事業主・自営業者」は「特に決まっていない」が多い。「使用金額」について、職業によって金額に違いが見られる。

表4 回答者の属性と居場所に関する利用行動の分析 ( $\chi^2$ 検定による有意差の一覧)

	訪問頻度	滞在時間 (一度あたり)	よく訪れる日	よく訪れる 時間帯	どれくらい前から 訪れているか	他人との交流 の有無	使用金額 (一カ月平均)	どこから よく行くか	移動時間 (自宅・居場所)	移動時間 (職場・居場所)	居場所の満足度 (価格)	居場所の満足度 (人)
性別	—	—	***	—	—	***	—	**	*	***	—	***
年代	—	—	***	—	***	**	—	—	**	—	—	*
都道府県	—	—	—	—	*	—	—	—	***	—	*	—
職業	—	—	***	—	**	—	***	***	—	**	—	—
勤務時間 (1日あたりの平均)	—	—	***	*	—	—	*	***	—	—	—	*
現在の場所で働いている期間	—	**	—	—	***	—	**	—	—	—	—	*
現在の収入 (年収)	—	—	***	—	*	—	***	***	—	—	—	—
現在の住まいの居住期間	—	—	—	—	***	—	—	—	—	—	—	**

有意確率 (両側) : \*\*\*: 1%有意, \*\*: 5%有意, \*: 10%有意, —: 有意差が認められなかった項目 ※着色部: 1%有意

表5 性別と居場所の利用行動 (残差分析)

	よく訪れる日			他人との交流		移動時間 (職場 - 居場所)					居場所の満足度 (人)				
	仕事がある日	仕事が休みの日	特に決ま っていない	ある	ない	30分 未満	30-60 分未満	60-90 分未満	90-120 分未満	120分 以上	不満	やや 不満	普通	やや 満足	満足
男性	+++	--		---	+++		--	++		++		++	++		---
女性	---	++		+++	---		++	--		--		--	--		+++

+++ (---) : 両側1%有意 (分位点2.58), ++ (--) : 両側5%有意 (分位点1.96) + (-) : 両側10%有意 (分位点1.65)

表6 年代と居場所の利用行動 (残差分析)

	よく訪れる日			どれくらい前から訪れているか				
	仕事がある日	仕事が休みの日	特に決ま っていない	1年未満	1-5年未満	5-10年未満	10-20年未満	20年以上
20代		++		+++	+++		---	---
30代								---
40代	+++		---					-
50代	+	--			-			+++
60代	---		+++	---	---		++	+++

+++ (---) : 両側1%有意 (分位点2.58), ++ (--) : 両側5%有意 (分位点1.96) + (-) : 両側10%有意 (分位点1.65)

表7 都道府県と居場所の利用行動（残差分析）

	移動時間（自宅 - 居場所）				
	30分未満	30-60分未満	60-90分未満	90-120分未満	120分以上
東京都	+++	--			
埼玉県		+	--	-	
神奈川県	----		+++		
千葉県				+	

+++ (---) : 両側1%有意(分位点2.58)、++ (--) : 両側5%有意(分位点1.96) + (-) : 両側10%有意(分位点1.65)

表8 職業と居場所の利用行動（残差分析）

	よく訪れる日			使用金額（一ヵ月平均）						どこからよく行くか		
	仕事がある日	仕事は休みの日	特に決ま っていない	0円	1- 5000円	5000- 10000 円	10000- 20000 円	20000- 50000 円	50000 円 以上	自宅 から	職場 から	同じ 頻度
会社員	+++		----					+++		----	+++	
派遣・契約社員	-										-	
個人事業主・自営業者		----	+++						++	++	--	
法人経営者				-			+					
公務員					+		-					
パート・アルバイト	-			++				----	----	+++	----	

+++ (---) : 両側1%有意(分位点2.58)、++ (--) : 両側5%有意(分位点1.96) + (-) : 両側10%有意(分位点1.65)

表9 勤務時間と居場所の利用行動（残差分析）

	よく訪れる日			どこからよく行くか		
	仕事がある日	仕事は休みの日	特に決ま っていない	自宅から	職場から	自宅と職場から同じ頻度
4時間未満		--	+++	+++	----	
4-6時間		----	+++			
6-8時間			-			
8-10時間				-		+
10時間以上	+		--	--	++	

+++ (---) : 両側1%有意(分位点2.58)、++ (--) : 両側5%有意(分位点1.96) + (-) : 両側10%有意(分位点1.65)

表10 現在の場所で働いている期間と居場所の利用行動（残差分析）

	どれくらい前から訪れているか				
	1年未満	1~5年未満	5~10年未満	10~20年未満	20年以上
1年未満	+++		----		
1-5年未満		+++			--
5-10年未満	----		+++	----	
10-20年未満	--	-		+++	++
20年以上	--	-		++	+++

+++ (---) : 両側1%有意(分位点2.58)、++ (--) : 両側5%有意(分位点1.96) + (-) : 両側10%有意(分位点1.65)

表11 現在の収入と居場所の利用行動（残差分析）

	よく訪れる日			1ヵ月に使う平均金額						どこからよく行くか		
	仕事がある日	仕事は休みの日	特に決ま っていない	0円	1- 5000円	5000- 10000円	10000- 20000円	20000- 50000円	50000円 以上	自宅 から	職場 から	自宅と 職場 から 同じ 頻度
100万円未満	--			+				-	----	+++	----	
100~400万円	--						--			++	--	
400~700万円												
700~1000万円	++	-							++	----	+++	
1000万円以上	+++	--		-		++		+		--		+

+++ (---) : 両側1%有意(分位点2.58)、++ (--) : 両側5%有意(分位点1.96) + (-) : 両側10%有意(分位点1.65)

表12 現在の住まいの居住期間と居場所の利用行動（残差分析）

	どれくらい前から訪れているか				
	1年未満	1-5年未満	5-10年未満	10-20年未満	20年以上
1年未満	+++		----		
1-5年未満		+++		--	----
5-10年未満			+++	-	
10-20年未満	--	--		+++	
20年以上	----		--	+	+++

+++ (---) : 両側1%有意(分位点2.58)、++ (--) : 両側5%有意(分位点1.96) + (-) : 両側10%有意(分位点1.65)

「どこからよく行くか」について、「会社員」は「職場から」が多く、「個人事業主・自営業者」、「パート・アルバイト」は「自宅から」が多い。表9に勤務時間と居場所の利用行動の残差分析の結果を示す。「よく訪れる日」について、「4時間未満」、「4～6時間」は「特に決まっていない」が多く、「10時間以上」は「仕事がある日」が多い。「どこからよく行くか」について、「4時間未満」は「自宅から」が多く、「10時間以上」は「職場から」が多い。表10に現在の場所で働いている期間と居場所の利用行動の残差分析の結果を示す。「どれくらい前から訪れているか」について、同じ場所で働いている期間が長い程、同じ居場所に訪れている期間が長い傾向である。表11に現在の収入と居場所の利用行動の残差分析の結果を示す。「よく訪れる日」について、高い年収である程、「仕事がある日」が多い。「使用金額」について、高い年収である程、多くの金額を使う傾向である。「どこからよく行くか」について、「100万円未満」、「100～400万円」は「自宅から」が多く、「700～1000万円」は「職場から」が多い。

表12に現在の住まいの居住期間と居場所の利用行動の残差分析の結果を示す。「どれくらい前から訪れているか」について、同じ場所での居住期間が長い程、同じ居場所に訪れている期間が長い。

#### 4. 居場所における利用目的の総合評価

図2で示す居場所における利用目的について、多数の利用目的の全体傾向を把握するために主成分分析を行った。ここで、利用目的の全体度数が大きい居場所（喫茶店・カフェなど）と少ない居場所（公民館など）があり、全体度数が大きい居場所の利用目的の影響が大きく、その他の影響が小さくなってしまふことを考慮し、居場所ごとに利用目的が計100%となるように変換（平準化）した後主成分分析を行った。また利用目的の「その他」は内容が不明のため分析から除外した。

表13に居場所における利用目的の総合評価の結果を示す。5つの主成分までで累積寄与率が71.80%となった。利用目的の主成分負荷量を確認した上で、それぞれ「学習・タスク行動」、「個人行動」、「コミュニケーション・購買行動」、「コミュニケーション・休息行動」、「音楽鑑賞行動」とした。「学習・タスク行動」は、「読み物」、「書き物」、「勉強または仕事」の主成分負荷量の値が高い。「個人行動」は、「待ち合わせ」、「パソコン・タブレット」の主成分負荷量の値が高い。

表13 居場所における利用目的の総合評価（主成分分析）

	学習・タスク行動	個人行動	コミュニケーション・購買行動	コミュニケーション・休息行動	音楽鑑賞行動
主成分負荷量					
勉強または仕事	0.7782	-0.3452	0.3447	0.0587	-0.1366
飲食	-0.2691	0.4689	0.6015	0.3734	0.2214
読み物	0.8349	-0.2142	0.1576	-0.0146	-0.0011
書き物（書く・描く）	0.8143	-0.0459	0.1662	0.2016	0.1109
パソコン・タブレット	0.2880	0.6020	-0.2582	0.1857	0.1851
スマートフォン・携帯電話	0.0882	0.3132	0.2693	-0.3800	0.1985
ゲーム	-0.3938	-0.4372	0.0313	0.0920	0.1590
音楽	0.1463	0.4073	-0.4469	-0.4870	0.5015
会話	-0.4360	0.0655	0.3964	0.6418	0.2667
運動・体を動かす	-0.3282	-0.6216	-0.3877	-0.2484	0.1451
休憩・睡眠・思考	0.1595	0.4135	-0.6755	0.3818	-0.1604
待ち合わせ	-0.0081	0.6995	0.0939	-0.1882	-0.2824
買い物	-0.2722	0.2022	0.2741	-0.3848	-0.7118
何もしない	0.0332	-0.0740	-0.4904	0.6444	-0.3528
主成分得点					
喫茶店・カフェ	1.96	1.07	1.45	-0.48	0.76
レストラン	-0.24	1.14	1.80	0.71	0.75
居酒屋・バー・クラブ	-0.95	0.63	2.47	1.30	1.16
公園	0.38	-1.58	-1.04	0.26	0.04
自然	-0.12	-0.46	-1.77	0.57	-1.37
図書館	5.21	-2.39	1.03	0.26	-0.65
公民館	0.20	0.04	-1.58	-2.88	1.73
その他の公共施設	0.30	-0.84	0.79	-0.35	-0.47
小売店	-1.01	0.24	0.84	-1.63	-2.19
複合商業施設	-0.95	1.72	1.38	-1.73	-2.25
スポーツジム・ヨガ・体育関連施設	-1.54	-2.38	-0.84	-1.11	0.53
ネットカフェ・カラオケ	1.67	2.94	-1.75	-1.36	1.31
映画館・劇場	-0.52	0.42	-0.01	-0.71	0.02
レジャー施設	-0.97	-0.76	1.20	-0.98	0.33
その他の娯楽施設	-2.40	-3.02	-0.41	0.20	0.84
美容施設・入浴施設	-0.42	0.96	-2.18	1.49	-1.61
寺・神社・宗教施設	1.66	-0.37	-0.72	1.43	-0.12
実家・親戚宅	-0.76	0.24	0.07	2.24	0.12
友人・恋人宅	-1.26	0.67	1.04	1.29	0.71
別荘	-0.24	1.72	-1.76	1.48	0.35
固有値	2.70	2.30	1.96	1.83	1.26
寄与率	19.31%	16.44%	14.01%	13.05%	9.00%
累積寄与率	19.31%	35.76%	49.76%	62.81%	71.80%

「コミュニケーション・購買行動」は、「飲食」、「会話」の主成分負荷量の値が高い。「コミュニケーション・休息行動」は、「何もしない」、「会話」、「休憩・睡眠・思考」の主成分負荷量の値が高い。「音楽鑑賞行動」は、「音楽」の主成分負荷量の値が高い。

### 5. 利用目的に基づく居場所の分類

次に、利用目的に基づき、多数ある居場所の分類を行うため、非階層クラスター分析を行った。ここでは、居場所を4つ程度に分類することを想定し、表13に示す「学習・タスク行動」、「個人行動」、「コミュニケーション・購買行動」の主成分得点を説明変数として非階層クラスター分析を行った。

図16に居場所の類型化の結果を示す。また、各説明変数が分類に貢献しているかどうかを一元配置分散分析によって評価した結果、どの変数も有意確率 $p < 0.01$ となり、クラスター間で有意な違いがあることを確認した。そして、表14に非階層クラスター分析より導かれた居場所の類型と類型内の施設を示す。図16および表13の結果に基づき、4つの類型を「目的別訪問型」、「活動的施設型」、「交流・購買施設型」、「知的活動施設型」とした。「目的別訪問型」は、「学習・タスク行動」や「個人行動」の値が高く（図16）、類型内施設に「ネットカフェ・カラオケ」や「美容施設・入浴施設」などが含まれる（表14）。特定の目的を持って訪れる施設が多いことから「目的別訪問型」とした。「活動的施設型」は、「学習・タスク行動」や「コミュニケーション・購買行動」の値が低く（図16）、類型内施設に「スポーツジム」や「その他の娯楽施設」などが含まれる（表14）。「交流・購買施設型」は、「コミュニケーション・購買行動」の値が高く（図16）、類型内施設に「レストラン」や「複合商業施設」などが含まれる（表14）。「知的活動施設型」は、「学習・タスク行動」の値が高く（図16）、

類型内施設は「図書館」である。また、各類型に含まれる回答者の類型内人数は、表14に示す通りである。「交流・購買施設型」は、類型内施設数が多いことに加え、回答者数の多い「喫茶店・カフェ」が含まれることから、類型内人数が多くなっている。本研究では、「実家・親戚宅」、「友人・恋人宅」が「交流・購買施設型」に分類されたが、川村ら<sup>9)</sup>による研究では、「喫茶店・カフェ」、「実家・親戚宅」・「友人・恋人宅」が違う分類になっているという点で違いが見られた<sup>注4)</sup>。川村らは、居場所感尺度（因子分析）を用いて居場所の分類を行っているが、本研究では、主成分分析による居場所での利用目的を用いて居場所の分類を行ったためであると考えられる。

### 6. 居場所分類に影響を及ぼす利用行動の評価

5章において類型化された居場所は、どのような居場所における利用行動の影響が大きいかわかるため、多項ロジスティック回帰分析を行った。目的変数を表14に示す4つの類型名「目的別訪問型」、「活動的施設型」、「交流・購買施設型」、「知的活動施設型」とし、説明変数を表2に示すアンケート内容の結果を用いた。基準カテゴリは「目的別訪問型」である。ステップワイズ法（投入確率：0.05、確率削除：0.1）により説明変数の選択を行った。多項ロジスティック回帰分析の際、「訪問頻度」は、選択肢「1日に1回以上」を「月に30回」、「2～3日に1回程度」を「月に15回」、「1週間に1回程度」を「月に4回」、「2～3週間に1回程度」を「月に2回」、「1カ月に1回以下」を「月に1回」とした。

表15に居場所分類に影響を及ぼす利用行動の評価の結果を示す。有意な説明変数は「勤務時間（時間）」、「訪問頻度（一ヵ月あたり）（回）」、「滞在時間（一度あたり）（分）」、「他人との交流の有無（有1、無0）」、「使用金額（一ヵ月平均）（万円）」、「移動時

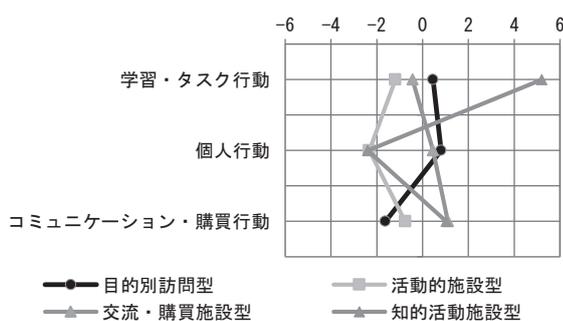


図 16 居場所の類型化（クラスター分析）

表 14 居場所の類型と類型内の施設

類型名	類型内の施設	類型内人数
目的別訪問型	公民館、ネットカフェ・カラオケ、美容施設・入浴施設、寺・神社・宗教施設、自然、別荘・宿泊施設	141
活動的施設型	公園、スポーツジム、その他の娯楽施設	154
交流・購買施設型	喫茶店・カフェ、レストラン、居酒屋・バー・クラブ、その他の公共施設、小売店、複合商業施設、映画館・劇場・音楽施設、レジャー施設、実家・親戚宅、友人・恋人宅	623
知的活動施設型	図書館	51

間（自宅－居場所）（分）」、「移動時間（職場－居場所）（分）」、「居場所の満足度（価格）（5段階評価：満足5、不満足1）」、「居場所の満足度（居場所にいる人たち）（5段階評価：満足5、不満足1）」の9つである。モデルの精度（モデルの適合情報）は $p < 0.000$ 、各説明変数の有意確率は、いずれも $p < 0.05$ である。またNagelkerkeの $R^2$ は0.67である。

以上より、回帰式の説明力および各説明変数は意味のある結果が得られたと解釈できる。「活動的施設型」は「他人との交流の有無」、「交流・購買施設型」は「居場所の満足度（居場所にいる人たち）」のExp(B)が高く、居場所分類に大きく影響する要素である。「知的活動施設型」は「居場所の満足度（価格）」のExp(B)が高いが、「他人との交流の有無」および「居場所の満足度（居場所にいる人たち）」が低いことから、「活動的施設型」と「交流・購買施設型」とは対照的な居場所であるといえる。

## 7. 考察

本研究では、首都圏において働く社会人を対象に、居場所の利用実態、居場所の特徴を明らかにすることを目的として調査および分析を行った。本研究による結果を踏まえ、不特定多数の人が訪れる居場所を計画するにあたり、訪問者の特徴を考慮した居場所づくりを根拠のある知見に基づき行うことができると考える。その際、居場所の運営者は、利用者の個人属性を把握する必要があるが、性別や年代、職業などによって、利用者は居場所に求める特徴が異なり、その特徴の優先順位も異なることから、居場所計画の優先事項を定めることが可能となる。例えば、本研究の「交流・購買施設型」の「レスト

ラン」の場合、この居場所を利用する人にとって重要な要素は、「居場所の満足度（居場所にいる人たち）」である。「居場所にいる人たち」には、居場所で働く店員および利用者どちらも含んでいる。さらに「交流・購買施設型」は、居場所の類型化（図16）において「コミュニケーション・購買活動」の点数が高いことから、多くの人はその居場所で「飲食」や「会話」を行っていることもわかる。

以上は施設整備の観点から考察を述べた内容であるが、働く社会人のワーク・ライフ・バランスに関する居場所づくりとして、次のことが本研究の結果を踏まえると考察できる。

職業や勤務時間といった働き方の違いによって「よく訪れる日」や「どこからよく行くか」といった居場所の利用傾向に違いがみられることから、不特定多数の人が訪れる居場所は様々な利用行動を許容する必要がある。

一方、利用者の属性と居場所における利用行動に関してはいくつかの傾向が見られるため、利用者の属性に応じた居場所づくりが可能になる。例えば、性別と居場所の利用行動（表5）において、「男性」は「仕事がある日」に訪れ、「他人との交流」は「ない」傾向である一方、「女性」は「仕事が休みの日」に訪れ、「他人との交流」は「ある」傾向である。性別の違いによらず利用される喫茶店・カフェ<sup>(注)</sup>では、平日に働く人が多いオフィス街において、平日は単身利用の席を多く配置するが、土・日・祝日はグループで利用できる席を多く配置して、利用者が利用しやすい居場所づくりを行うことが可能である。また、職業と居場所の利用行動（表8）において、「会社員」は「仕事がある日」に訪れる、「職場」からよく行く傾向があるため、居場所となる場所を社内に設

表15 居場所分類に影響を及ぼす利用行動の評価（多項ロジスティック回帰分析）

	活動的施設型			交流・購買施設型			知的活動施設型		
	Exp(B)	Exp(B)の95%信頼区間		Exp(B)	Exp(B)の95%信頼区間		Exp(B)	Exp(B)の95%信頼区間	
		下限	上限		下限	上限		下限	上限
勤務時間（時間）	1.02	0.93	1.11	1.09	1.02	1.17	0.99	0.86	1.13
訪問頻度（一ヵ月あたり）（回）	1.10	1.06	1.13	1.07	1.04	1.11	1.06	1.00	1.11
滞在時間（一度あたり）（分）	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00
他人との交流の有無（有1、無0）	1.67	1.02	2.75	0.96	0.65	1.43	0.14	0.05	0.43
使用金額（一ヵ月平均）（万円）	1.01	0.90	1.13	1.01	0.92	1.12	0.01	0.00	0.08
移動時間（自宅－居場所）（分）	0.99	0.99	1.00	1.00	1.00	1.01	0.99	0.97	1.00
移動時間（職場－居場所）（分）	1.00	1.00	1.00	1.00	0.99	1.00	0.99	0.98	1.00
居場所の満足度（価格） （5段階評価：満足5、不満足1）	0.76	0.60	0.98	0.82	0.67	0.99	1.52	1.05	2.19
居場所の満足度（居場所にいる人たち） （5段階評価：満足5、不満足1）	1.11	0.85	1.45	1.40	1.13	1.73	0.86	0.58	1.27

※基準カテゴリは、目的別訪問型

置することも考えられる。施設整備に関連した内容であるが、利用者の属性に応じた居場所づくりを展開することで、利用者の満足度を高めることができると示唆される。いずれにせよ、利用者の属性や利用行動を踏まえた居場所づくりを行うことにより、ワーク・ライフ・バランスがよりよくなると考える。

## 8. 今後の課題

本研究では社会人を1つの属性と見なして居場所を調査して社会人全体としての傾向を把握したが、社会人の中でも配偶者の有無や同居者の違いなどさまざまな属性がある。今後の課題として、より具体的な属性を対象として、詳細な調査および分析を行う必要がある。また本研究で示した個人属性と居場所の利用行動との関係の他、居場所の利用行動に関する項目間の分析結果を示す余地があるため、検討を進めた上で提示する必要がある。さらに、表15に示す3つの施設型の代表事例へのヒアリング・実態調査を行うことで、本アンケート調査の読み方もより一層具体的なものになり、新たな知見が得られると考えられる。

### 【補注】

- 注1) 本研究におけるWebアンケートは、調査会社（楽天インサイト株式会社）のアンケートモニター登録者を対象に実施している。本論文の著者がアンケート調査内容を作成し、作成した内容を調査会社を通してアンケートモニターより回答を得ている。表1に示す「調査対象地」、「調査対象者」に該当する回答者を有効回答者として、表2に示す「1. 回答者の属性」、「2. 居場所について」を質問している。
- 注2) 均等割り付けについて：調査会社へ依頼する際、回答者属性の内訳を指定している。性別：男性・女性それぞれ500名、年代：20代～60代それぞれ200名、都道府県（居住地）：東京・埼玉・千葉・神奈川それぞれ250名としている。
- 注3) 回答者が居場所を選択回答する際に提示した名称は、次のとおりである。「喫茶店・カフェ」、「レストラン」、「居酒屋・バー・クラブ」、「公園」、「自然（海・山など）」、「図書館」、「公民館（集会所・コミュニティセンターなど）」、「その他の公共施設（博物館・美術館など）」、「小売店（スーパー・本屋・電気店など）」、「複合商業施設（デパート・ショッピングセンターなど）」、「スポーツジム・ヨガ・体育関連施設」、「ネットカフェ・カラオケ」、「映画館・劇場」、「レジャー施設（遊園地・動物園・水族館など）」、「その他の娯楽施設（パチンコ・競馬場・ゴルフ場・麻雀場など）」、「美容施設・入浴施設（美容室・エステ・銭湯など）」、「寺・神社・宗教施設」、「実家・親戚宅」、「友人・恋人宅」、「別荘」、「その他（居場所はあるが上記には無い）」、「無し（自分の居場所として訪れる場所は現在無い）」
- 注4) 川村らの研究において、「喫茶店・カフェ」は、「一人でリラックス」、「一人で仕事・勉強」のクラスターに分類されている。「実家・親戚宅」と「友人・恋人宅」は、「心の居場所」、「実家帰省」、「誰にも邪魔されたくない」のクラスターに分

類されている。

注5) 居場所を喫茶店・カフェと回答した158人の性別内訳は、男性80名、女性78名である。

### 【参考文献】

- 1) 厚生労働省（2019）、「働き方改革を推進するための関係法律の整備に関する法律」について「働き方改革～一億活躍社会の実現に向けて」,  
[https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/000014832\\_2\\_00001.html](https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/000014832_2_00001.html)（最終閲覧日：2019年4月15日）
- 2) NHK放送文化研究所（2016）、「2015年国民生活時間調査報告書」,  
[https://www.nhk.or.jp/bunken/research/yoron/20160217\\_1.html](https://www.nhk.or.jp/bunken/research/yoron/20160217_1.html)（最終閲覧日：2019年4月15日）
- 3) 総務省統計局（2017）、「平成28年社会生活基本調査 生活行動に関する結果」,  
<http://www.stat.go.jp/data/shakai/2016/kekka.html>（最終閲覧日：2019年4月15日）
- 4) 内閣府（2000）、「余暇時間の活用と旅行に関する世論調査」,  
<https://survey.gov-online.go.jp/h11/yoka/2-1.html>（最終閲覧日：2019年4月15日）
- 5) レイ・オルデンバーグ（2013）、「サードプレイス コミュニティの核になる「とびきり居心地よい場所」」, みすず書房
- 6) 林田大作, 舟橋國男, 木多道宏（2003）, 「職場周囲に構築される「サードプレイス」に関する研究」, 都市計画論文集, Vol.38, No.3, pp.433-438
- 7) 木下誠一, 矢部亮, 今井正次（2008）, 「居場所としての地域公共施設のあり方に関する研究」, 日本建築学会計画系論文集, Vol.73, No.628, pp.1205-1212
- 8) 川村竜之介, 谷口綾子（2013）, 「まちなかの居場所が生活の質・地域への意識に与える影響に関する研究」, 土木学会論文集D3（土木計画学）, Vol.69, No.5, pp.I-335-I-344
- 9) 樋野公宏, 石井儀光（2014）, 「高齢者における居場所の利用実態と意義」, 日本建築学会計画系論文集, Vol.79, No.705, pp.2471-2477
- 10) 畠山雄豪, 丹羽由佳理, 佐野友紀, 菊池雄介, 佐藤泰（2015）, 「立地環境および利用者傾向が行動分布に与える影響」, 日本建築学会計画系論文集, Vol.80, No.711, pp.1067-1073
- 11) 小池博, 太田壮哉, 長谷川直樹（2018）, 「居住地から目的地までの距離が愛着と満足の関係性に与える影響に関する研究」, 都市計画論文集, Vol.53, No.3, pp.1138-1144
- 12) 山田崇史, 森口元貴（2018）, 「大学生のストレス解消に利用されるサードプレイスに関する研究」, 都市計画論文集, Vol.53, No.3, pp.1215-1222